（AL 関連の実践）【高校/英語】“対話”で深め“再話”で高める４技能統合型授業

重野金美（大阪府立岸和田高等学校）

溝上のコメントは最後にあります

対象授業

・**授業**：1 年　コミュニケーション英語Ⅰ(3 単位)

・**生徒数**：40 名×3 クラス

・**教材**：PRO – VISION English Communication I（三省堂）

第 1 節　授業の目標

本授業では生徒の英語の４技能（聞く・読む・話す・書く）の向上を目的として、自らが読んだり、聞いたりしたことや経験したことについて、英語で話したり・書いたりするアウトプット活動に力点を置いています。また教科書で学んだ内容、語彙、文法をアウトプットできるレベルまで引き上げるために、教科書の本文内容についての絵や写真だけを見て要約を口頭で伝える活動（ストーリー・リテリング）を毎回の授業で行います。毎回の授業で、英語を用いたやり取り（対話）の場面を増やし、生徒の英語運用能力を養います。また、学年目標として、１年次の間に英検準２級取得を掲げています。

第 2 節　授業の流れ

①　１分間チャット

毎回の授業で、生徒は教科書内容に関連したトピックについて、ペアを３回交代して、３人の相手と英語でのチャットを行います。

②　ストーリー・リテリング（再話）

前時の復習として、前回の授業で学習した教科書本文の内容について、絵や写真だけを見て、英語で自分のパートナーに伝えます。その際、パートナーに自分がリテリングしている動画を、自らのスマートフォンで撮影してもらい、発表後に動画を見て、自らの発話を振り返ります。

③　オーラル・イントロダクション

教師が、英語を用いて本時で学習する教科書内容の一部について、口頭で説明します。その際、読み取りのポイントとなる問いを与えます。

例）How do plants communicate with insects? What do you think?

④　思考タスク

オーラル・イントロダクションで教師より投げかけられた問いについて、自ら考え、ペアで英語を用いてのディスカッションを行います。

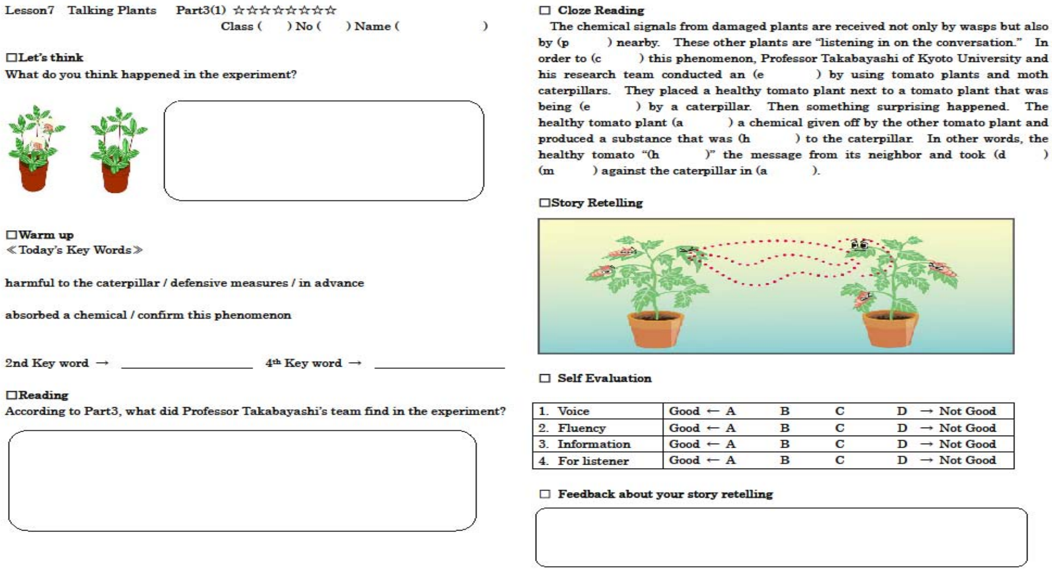
⑤　新出語彙の導入

新出語彙（チャンク単位）について、綴り、意味、発音について確認した後、CD の本文音声を聞き、聞こえてきた順にプリントに記載されている新出語彙を並び替えて、その順番を確認します。

⑥　本文のスキャニング活動
思考タスクの中で、ペアでやり取りをした問いの答えを探しながら、個人で教科書のリーディングを行います。その後、ペア→クラスの順番で答えを確認します。

⑦　本文の音読活動
次の授業のストーリー・リテリングができるようになることを目標として、様々な音読活動を行います。

例）Listen and Repeat（教師の後に、つづいての音読）
Overlapping　（教科書を見ながら、CD 音声に重ねての音読）
Buzz Reading　（個人のペースで自由に音読）
Cloze Reading（本文にある（　）抜きになっている内容語を補っての音読）



Lesson7　Talking Plants　Part3(1) ☆☆☆☆☆☆☆☆
Class (　　) No (　　) Name (　　　　　　)

□Let's think
What do you think happened in the experiment?

□Warm up
≪Today's Key Words≫

harmful to the caterpillar / defensive measures / in advance

absorbed a chemical / confirm this phenomenon

2nd Key word →　＿＿＿＿＿　4th Key word →　＿＿＿＿＿

□Reading
According to Part3, what did Professor Takabayashi's team find in the experiment?

□ Cloze Reading
The chemical signals from damaged plants are received not only by wasps but also by (p　　　) nearby. These other plants are "listening in on the conversation." In order to (c　　　) this phenomenon, Professor Takabayashi of Kyoto University and his research team conducted an (e　　　) by using tomato plants and moth caterpillars. They placed a healthy tomato plant next to a tomato plant that was being (e　　　) by a caterpillar. Then something surprising happened. The healthy tomato plant (a　　　) a chemical given off by the other tomato plant and produced a substance that was (h　　　) to the caterpillar. In other words, the healthy tomato "(h　　　)" the message from its neighbor and took (d　　　) (m　　　) against the caterpillar in (a　　　).

□Story Retelling

□ Self Evaluation

1. Voice	Good ← A　B　C　D → Not Good
2. Fluency	Good ← A　B　C　D → Not Good
3. Information	Good ← A　B　C　D → Not Good
4. For listener	Good ← A　B　C　D → Not Good

□ Feedback about your story retelling

図１　ワークシート実例（大きく）

第 3 節　授業で大切にしていること

①　本文を読もうという気持ちにさせる

本授業では、生徒自身に、「英語を読みたい」という気持ちにさせることを大切にしています。その際に、キーワードとなるのが「３方向の対話」です。１つ目はオーラル・イントロダクションで聞いた読み取りのポイント（How do plants communicate with insects? What do you think? など）について自らの意見を英語で作ります（自己との対話）。次に、そのポイントについてペアで英語でのディスカッションを行います（他者との対話）。これらの２つの対話を経ることで、生徒は本文内容について自らの思考を深化させ、教材と生徒が結びつき、本文内容への興味・関心が高まります。その後、興味・関心が高まった状態で、読み取りのポイントを探すという目的を持ったリーディング活動に入ります（教材との対話）。

図２　３つの対話（左から自己・他者・教材との対話）

② 多様な「他者とのやり取り」の機会を与える

本授業では冒頭の１分間チャットやストーリー・リテリング、教科書本文に関する英語でのディスカッション、ペアで一緒に考えながら（　　）抜きの内容語を補う音読活動など、他者とのやりとりの機会を多く与えることで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることを大切にしています。

③ 読むことから話すことへ繋げる

教科書本文を読んで終わりにするのではなく、ストーリー・リテリングの活動を通して、「読むこと」から「話すこと」へと繋げます。その活動を通して、教科書で学んだ内容・語彙・文法を発表語彙（話せる・書ける語彙）まで高めていきます。

図３　ストーリー・リテリングの様子

④ 自分の発話を動画で振り返る

授業外では、英語を話す機会も少なく、さらに自分の発話を見る機会はなおさらありません。そこで、授業では上記のストーリー・リテリングの際に自分のリテリングをパートナーにスマートフォンで撮影してもらい、その動画を見て、声の大きさ、流暢さ、十分な情報が入っているか、相手を意識しているか、などの観点から振り返らせ、また気づいたことをワークシートに記述させて、次につなげる工夫をしています。

図４　動画を用いた、自らの発話の振り返り

第４節　今後の課題

①　ストーリー・リテリングの評価（指導と評価の一体化）

本授業では前回学習した本文内容の要約を口頭で相手に伝えるストーリー・リテリングの活動を実施しており、毎回の授業で生徒は自分のリテリング動画を確認し、自らの発話について教員から示した観点に沿って振り返りを行っています。指導と評価の一体化の観点から、できれば、生徒のリテリング動画を回収し、評価に使用することが望ましいですが、１学期は実施できていません。今後は、動画を回収するシステムの構築や授業内でのリテリングテストの実施を行います。

②　やり取り（対話）の英語化

本授業では生徒が英語を用いた「やり取り（対話）」の場面を多く与えることに留意しています。しかし、トピックが難しい、生徒に背景知識が少ない、または話を展開させる言葉（英語）を知らない場合など、どうしても日本語に頼ってしまう場面が多く見受けられます。そのため、今後は発話をスムーズにさせるように、丁寧なスモール・ステップを踏みながら、かつ生徒の発表語彙（話せる・書ける語彙）を充実させ、生徒同士のやり取りを可能な限り、英語だけを用いたものにすることをめざします。

溝上のコメント

- 2017 年 12 月に校内研修会があり、重野教諭のコミュニケーション英語Ⅰの授業を見学した。岸和田高校は、大阪府の進学トップ 10 校を指定する GLHS（グローバルリーダーズハイスクール）の指定校でもある。
- 重野教諭の AL 型授業は、AL 型授業の基礎的なポイントをしっかり押さえたものであり、全体的に注文をつけるところがほとんどなかったと思われたくらいである。しかも、テンポがはやく、１つ１つのユニットが流れるように展開して、50 分という時間はあっという間に過ぎた。これは生徒も楽しかっただろうと思う。進学校に典型的に見られる生徒の適応力も容易に見て取れ、生徒たちは教師の指示に素直に、元気よく従い学習に取り組んでいた。とても良い学校だと感心した。

  なお、この学校の生徒の雰囲気は、同日に見学した五味智子教諭の物理基礎の授業ページに動画があるので、あわせてご覧いただきたい。

  http://smizok.net/education/img/aAL_00030_14.mp4
- 本ページで紹介された授業は私が校内研修会で見学した授業とは別であるが、私が見たジグソー法を用いた AL 型授業で指摘できる技巧的な場面を２点紹介したい。

  １つは、授業冒頭でワークの評価規準をルーブリック形式で示していたことである（図５を参照）。これは「逆向き設計（backward design）」と呼ばれる指導と評価を一体化させた技法で、教師が最後に求める学習成果をあらかじめ示し、その成果に到達するように生徒が学習することを期待するものである。知識の習得だけでなく、さまざまな資質・能力を育成することをも求めるアクティブラーニング型の授業改革なので、求める学習成果は多次元に

わたる。それを先に示しておかないと、生徒は学習や課題への取り組みを通してどのような成果が期待されているのかわからないのである。秀逸な場面である。

図５　ルーブリック形式の評価規準を授業冒頭で説明している場面

・　もう１つの技巧的な場面は、AL 型授業の基礎ポイントである個－協働－個の学習サイクルがしっかりと回っていたことである。生徒たちは始めに重野教諭より与えられた課題についての自らの意見を作り、他者と意見の交換をする。その後、ジグソー法の活動で示されたその課題についての４つの解決策を４人グループのメンバーが１人１パートを担当し、英文を読み、再び元のグループへ帰り、各パートの内容を報告し合う。次に４つの解決策のうちどれが最良かについてグループで議論し結論を見出す。最後に他のグループのメンバーと自分のグループの結論を伝え合い、新たな視点に気づいた後、個人で再び同じ課題について考え、自らの意見をまとまりのある英語で表現していくという流れである。図６は、最初に課題について自らの意見について考え、ジグソー法で各パートの内容を伝え合っている様子である。

図６　ジグソー法場面での個－協働－個の学習サイクル

・　重野教諭の授業紹介の中で、「自分の発話を動画で振り返る」という学習活動がある。アイディア自体は新しくないが、それを実際におこなっているかとなると、温度差がある。最近は生徒のほとんどがスマートフォンをもっているので、BYOD（＊）でおこなえばいい。

帝塚山学院中学校高等学校で、覚えた英文を録音し、内容、発音、明瞭さ、速度を評価する取り組みが本ウェブサイトで紹介されている（下記）。あわせて参考にしてほしい。

（＊）BYOD とは、Bring Your Own Device（自分のデバイスを持ち込む）の略で、生徒が

自分の端末（スマホやタブレットなど）を教室に持ち込んで使用することを指す。

・　進学校や進学コースの授業では、全員がサボることなく主体的・対話的に学んでいるように「見える」。しかし、提出されたワークシートや取り組みの成果（物）を見ると、実際にはある程度の学習ですませている生徒や深く学んでいない生徒のいることがわかる。これはアクティブラーニング論を超える学習一般の問題であり、本ウェブサイトの役割を超えている。しかし、ここまで持ってくれば、新しい社会に対応するアクティブラーニング型授業への転換を、少なくとも外形的には一定程度確立したといえる。別のページで紹介した五味教諭の授業も重野教諭の授業も、このようなことを考えさせられるすばらしい授業であり、生徒たちもとてもステキだった。外形的なアクティブラーニング型授業のポイントは十分押さえているので、最後は学習の質、深い学びへと突き進んでほしい。

【参考ページ】

✓　（AL 関連の実践）他者との議論を通じた学びの深化（五味智子＠大阪府立岸和田高等学校）
✓　（理論・データ）逆向き設計（作成中）
✓　（桐蔭学園の教育改革）個－協働－個の学習サイクル（関谷吉史）
✓　（AL 関連の実践）アクティブなインプット学習から協働学習につなげる授業（乾菜摘＠帝塚山学院中学校高等学校）

プロファイル

・　**重野金美（じゅうの　かなみ）＠大阪府立岸和田高等学校**
・　一言：生徒に英語で自己表現をする機会を持たせることで、「自分を表現する」楽しさを伝えていきます。自分自身も生徒の手本になれるよう私にしかできない方法で自己を表現し続けます。